

ご挨拶

合 掌

早秋の候、皆様におかれましてはますますご清祥のことと存じます
さて妙法華寺を退いては一年半の月日が過ぎました

退任記念の冊子がようやく出来上がりましたので、お届けさせて
頂きます

早々にお届けするべき所でありましたが、体調すぐれない中での
編集となり、大変遅くなりました事 どうぞご容赦ください
民様のご健勝を祈念し挨拶とさせていただきます

再 拝

令和二年三月吉日

本了院妙法華寺 院主 下 堂 泰 鑑

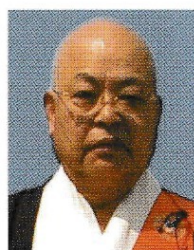
時 ◆ 平成三十年十月十四日佳辰 ◆

五十有五年の春秋
下堂泰鑑上人の
不績成満

覚如山本了院妙法華寺



ごあいさつ



妙法華寺住職 第二十八世

下 堂 泰 鑑

佛 道……。それは長く険しい道 かつて記念誌のごあいさつのでじめに記しました。同じ文
言が浮かびます。

あつ……思えば、当山住職として晋山いたしましたのが昭和三十九年五月のことでした。いつのま
にか五十五年の歳月が流れております。山門の標板に記しました「中興の祖……」の文言は、荒廃し
た寺容を前に師範日宣聖人から「復興を第一義とせよ」と師命を受けたことに由来します。

爾来、稲荷山への奉職のかたわら、当山復興に邁進してまいりました。しかしそれは行く手に立ち
はだかる様々な「現実の壁」への絶望的な挑戦とも云うべきものでした。

信篤き慈母は「護法のために、身命を惜しまず、菩薩行をひたむきにするんだよ、きつと尊天ご加
護下さるよ……」この言葉が頭から離れなかつたのです。

なかでも最大の難問は新しい時代を開くために必要とされる境内の発展性を阻害する当山の立地条件
でした。

「新天地を求めては……」しかし伝統の聖地移転など思いもよらぬ発想でした。それが、天佑か、
いな「神助か」工を興して十余年。ついに難問山積の大聖業は高祖師日蓮大聖人の三たびにわたる
記念辰日を迎え入れて、いわば奉聖記念年として信縁大衆に協賛を得るために東奔西走ことに師範聖
人、法尊兄日信聖人のご協賛はの庇護、最尊信縁の方々の身を挺したご助力、ご協力、言葉は尽くせ
ません。おかげで記念事業円成を以て「中興之祖」に任じさせていただくこととなりました。

「中興之記念事業」は山門に掲げました「標板」に詳しく表示いたしております。

当山の中興記念事業は山門壁面に掲げた「中興開山之記」標板に次の文言を記しています。

中興開山之記

当山は寛永六年（一六二九）不空院の別院として建立された
 開基は城国院日鳳聖人往昔は覺如山水院妙法華寺と
 称した大檀越庭瀬藩主戸川氏の撫川移封に伴い板倉藩
 国家老森田氏が当山の大檀越となり基礎が確立された
 当山に勧請し奉る太摩利支天王は天保五年（一八三四）
 赤林園喜多右衛門式從公の帰依を得て日照聖人が宮殿を
 建立祭祀された戸川氏懷中本尊との位があり尊容比類を
 見ず神像である昭和六十年日蓮大聖人七百遠忌を記念
 して西北九の新淨地に十間四面（雨垂落）創建當時の室町
 期寺院建築様式を留め大木堂を建立岡山市庭瀬旧跡より
 御木尊一塔兩尊四十一祖師像太摩利支天王の尊像と
 遷座移転した平成七年太摩利支天王祭祀以来亥年を算当
 三十一回この嘉節辰を繼紹して尊天の宮殿拝殿等を建てる
 往昔の神殿様式を整え記念大開帳を奉行せし
 更に平成十四年日蓮大聖人開宗七百五十年を迎えその
 記念事業として鐘樓銅像建立を祭願余当山中興の祖に任じ
 信縁大衆の結集を計り聖業を推進するものなり

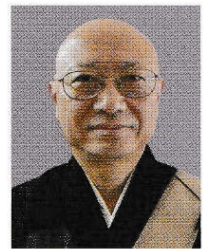
平成八年十月堂上法慶の日当山庚戌世妙法華院日鑑誌

法勲を讃える

岡山県宗務所長

大野 玄 秀

(太然寺住職)



合 掌

下堂泰鑑上人の妙法華寺御退職にあたり、岡山県寺院を代表いたしまして一言申し上げます。

下堂上人は、昭和三十九年本了院（移転後、妙法華寺に改称）住職に就任以来、今年一月に退職するまでの何と五十五年の間、この妙法華寺の法燈を護ってこられました。

その間、最上稲荷の重鎮として稲荷歴代管長を支え、管内宗門においても各種役職を歴任、組寺の活動等にも積極的に参加され、近年は良き相談役・ご意見番であつたと聞いております。

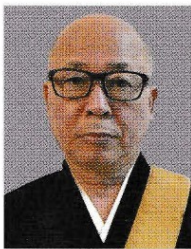
特に、昭和五十九年の移転に伴う大本堂・客殿庫裡建立は皆様方の記憶に残る大事業でありました。その後も、拝殿、本殿、鐘樓堂の建立等を行い、まさに寺観を一新されました。

このように永年に渡り、檀信徒の教化と寺門の興隆に止暇断眠の御精進を賜り、正法の宣布にお尽くしいただいた法功はまことに大なるものがあります。

ここに上人の赫々たる法勲を讃え、永年の法芳に深謝し御慰労の言葉とさせていただきます。

再 拝

入退山に思う



岡山県宗会議員 教務部長

北 山 孝 治

(妙楽寺住職)

下堂泰鑑上人、この度妙法華寺ご住職をご勇退なさるとのこと、心よりご慰労申し上げます。

管内の会合でお姿をお見かけし、お元気なご様子に接しておりましたので迂闊にもお歳の事はあまり気にかけ
ておりませんでした。八十六歳になられるとお聞きし驚きました。長きにわたり妙法華寺さまをお護りにな
られましたこと、甚深の敬意を表する次第です。現在の立派な伽藍は、下堂上人のご丹誠によるもの、まさに
新寺建立の觀があります。それだけに建設に際しては、様々なご労苦がおりになったことと推察いたします。
今般、すばらしい後継住職を得られ、肩の荷を下ろされていることと存じますが、ご院首として、管内のご
長老として、私どもを引き続きご訓導くださいますことを衷心よりお願い申し上げます。

大瀬戸泰康上人、ご住職就任おめでとうございます。上人には、中島妙江上人のお弟子としてご紹介いた
きお話させていただいたのが最初だと記憶しております。最上稲荷教よりのご転属ですからそれほどお付き合
いが古いわけではないのですが、お会いすればいつもニコニコと話しかけて下さり、勝手に親しみを感じてお
ります。

大瀬戸上人は、在家から中島上人のご教導によりご出家された方ですから、信仰的な基盤は磐石でいらつしや
います。ご住職になられますと活躍の場は更に広がります。妙教寺さまのご重職に就かれながらのことです。から
大変なことも多くなるのかもしれませんが、檀信徒教化に大いに力を発揮していただけるものと確信しており
ます。

奥様の勝子さんとは、一心寺さまのインド、ブッダガヤ分院開堂七周年の旅で一緒させていただきました。
明るくて、優しく、誠実で、お寺の奥様としてピッタリの方です。お二人で力を合わせられての、妙法華寺
さまの更なる発展をお祈り申し上げます。

優しい言葉



生師法縁岡山県縁頭

山 本 勝 也

(日應寺住職)

「お変わりなく」「お元気かな」お会いする度に、穏やかな口調で、声をかけて頂いていた下堂日鑑上人、長

い間のご法務お疲れ様でした。私と下堂上人の間に、お二人のお上人がいらつしゃいます。

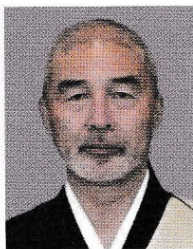
お二人ともご遷化されましたが、お一人は田中日淳上人（本門寺貫主、日蓮宗管長）と新倉日立上人（大林寺寺執事長、本門寺執事長、瀧口寺貫主）です。下堂上人は立正大学には本門寺から通学されていたと聞いております。当時、田中日淳上人は本門寺執事長、新倉日立上人は、執事として、本門寺にいらつしゃいました。

私は大学史学科在学中、池上学寮にお世話になり、当時の寮鑑が田中日淳上人で、新倉日立上人は史学科の助手として、大変お世話になりました。本門寺庭園の復元の際は、度々ご来岡され、下堂上人と共に下堂上人が執事長をされていた、高松稲荷妙教寺様や後楽園等を見学にご一緒させていただきました。

こうしたご縁で、下堂上人と、お話をさせて頂くようになりました。初めて下堂上人にお会いしたのは何処か忘れましたが、第一印象は恐い方―ごめんなさい―と思われましたが、法務では信城寺様の秋季彼岸施餓鬼会、宗務所の会議、法縁の会議等、前述のとおり、優しく声をかけて頂きました。今後、法務でのお会いする事がないのは、大変寂しいかぎりですが、ご勇退されましても、お身体ご自愛いただき、私達後輩の為に、ご指導ご厳達ください。

合 掌

修法師の鑑



岡山県修法師会会長

石 川 正 之

（蓮光寺住職）

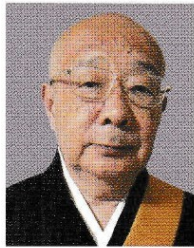
下堂泰鑑僧正、御当山の住職として五十五年間の御奉職、誠に苦勞様でございました。お上人は立正大学卒業後、昭和三十一年十一月一日、二十五才で「妙法広布」の大願を持って身延山大荒行堂に初行として入行され、「如来秘密神通之力」の法を修する為に壹百日の苦修鍊行に耐え、翌年二月十日無事成満されています。

大荒行壹百日で得られたお力と、お上人の人を包み込む様なお人柄による檀信徒教化と寺檀和融により、見事に堂宇の整った妙法華寺へ「寺観一新」されました。県内の修法師会では、昭和六十三年より一期四年間、

常任幹事の大役をお勤めいただきました。平成二十年六月には、全国日蓮宗修法師会連合会より「修法歴五十年表彰」をお受けになりました。同十月の荒行入行壮行会に併せて、下堂上人の「五十年表彰のお祝い」をさせていただいた席での御挨拶で、身延山大荒行堂を振り返られ「世の中が裕福でなく、入行に掛かる費用を用意するのも大変な時代、不惜身命の決意を持つての入行でした。当時はまだ戦後の混乱期で、予科練帰りの気性の荒い先輩僧がいて、今では考えられないような訓育（指導）の毎日で、本当にこのまま死ぬんじゃないかとも思いましたが、目に見えないお導き、鬼子母尊神様のご守護をいただき成満することが出来たと思っています。この壱百日の体験が、人として、僧侶としての私を育ててくれ、良き檀信徒にも恵まれ当山の大事業も無事円成する事が出来たものと感謝しています。我々修法師には妙法広布、衆生の救済という大きな使命があります。「誦経文」に「誦経の利甚だ大いなり、経に曰く無量の珍宝を以って布施するも、誦経一偈の功に及ばず」とあります様に修行の現証は確かに経力によって現れます、どうぞ皆さんも、日蓮大聖人のご遺志を継承するものとしての自覚をお持ちになられ日々精進される事をご期待しております。」等お話を頂きました。ご勇退後も修法師会の大先輩上人として御指導の程宜しくお願い致します。

合掌

功績を思う



庭瀬組寺代表

初智修

（妙傳寺住職）

時が過ぎゆくは経ってしまい、後ろをふり返りますとあつという間の五十五年でしたでしょう。

仏教では一日一日が大切であり、一日を一生と心得て生きるべし、一生懸命生きるべしと教示下さっております。

下堂上人の功績を述べ、積み重ねました功德を思いおこしたいと思います。

一日一日を力いっぱいにつとめてこられました。下堂上人が最初庭瀬の旧寺院にこられた時には本堂の床が

抜け落ちるようなありさまでした。稲荷日宣上人はその様を見られ「下堂をここに来させるのではなかった。」と言われたようですが、下堂上人の負けん気の強さに火をつけられたのではないかと思います。

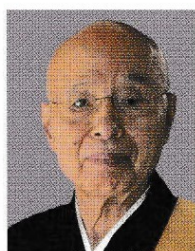
昭和六十年には日蓮大聖人第七百遠忌を記念して当西花尻の地に土地を求められ十間四面の大本堂を建立され、平成七年大摩利支天の空殿、拝殿等を建立、記念大開帳を執行され、更に平成十四年日蓮大聖人立教開宗七百五十年を迎えるにあたり記念事業として鐘樓・銅像故御立発願され、自ら当山中興の祖に任じられ浄行を推進されました。又、供養塔を建てられ、今日迄、葬儀において引導を渡された霊位の供養を檀信徒の皆様と共にされておられます。当山に多大な貢献をされました事、誠に尊く諸天の褒めたもうところでございます。

当山に深縁をもたれた大瀬戸上人に継承されます事は多いなる喜びでございます。大瀬戸上人は色々な事を学ばれ、檀信徒の相談にも答えることが出き、実直な、丁寧な方でございます。たくさん引き出しを持たれておられる方でございます。どうか皆様でもり立てていって下さい。よろしく願います。

合掌

岡山の師父

下堂泰鑑上人



東京都 養源寺住職

前田利勝

下堂上人を最初に知ったのは、上人が大本山池上本門寺で修行されながら立正大学に通っておられる頃でした。しかも、池上の町をご自分の庭のように、颯爽とスクーターで走りまわり、二十四ヶ寺の塔頭寺院に我が家のように出入りする上人を、当時中学生の私は、まさか修行中の学生さんとは知らず、加えてあの、押しも押されぬ貫禄の持ち主です、きっと本山の偉い役職員に違いないと思っておりました。そういえば、ある日スーツを着て大学に行ったところ、教授から「どちらが学生か教授かわからない」と、その着用を禁止されたというエピソードもこの頃のものだったようで、上人は池上でも、すでに有名人でした。

その下堂上人との再会はそれから約十年後、今から五十年以上も昔のことです。当時、最上稲荷の管長であられた稲荷日宣上人が、山門復興のために長く中断されていた博士論文の完成を目指されることになり、その助手として最上稲荷の図書館に勤務することになったのですが、初めての地で右も左もわからない私を弟分のようにして、それは親身にお世話くださったのが下堂上人でした。

ふり返ると、あの頃の最上稲荷のお山全体も、青春の真只中にあつたように思われます。下堂上人はじめ若い職員が中核となつて、それぞれの仕事に大変な情熱を注いでおられました。お山全体が刻々と動いているような、新鮮で緊張に満ちた毎日でした。

あの、ギョロリとした目に精いっぱい涙みを込め、斜め下から舐めあげるようにして、「なあ、勝つつあん……」と、どすの利いた声で言われれば、たいがいのことは従わざるを得ません。しかし、それでも意の通りにならないと知ると一転、どこにそんな声が潜んでいたのか、それはしおらしい声で「どうしてもおえんかのお……」とその豹変ぶりはまさに千両役者です。ブルドーザーのように押し進む力強さと超繊細な神経を兼ね備え、何事にも一途に向かつていかれた上人の、胸を張つて来る姿も、肩を落してゆく後ろ姿も、呵々と大笑する声も、吠えるような泣き声も昨日のことのように記憶に鮮明です。

上人が丹精されたさまざまな事業や宗門内外に残された功績の多大さについては、私ごときが申し上げるまでもないことですが、人生の軸がしっかりと信仰に置かれていれば、どんなことがあつても怯むことはないのだと、人間味あふれる生き方でその範を示してくださったことこそ、誰にも真似のできない上人の大きな功績ではなかったかと思っております。

岡山と聞くと瞬時に下堂上人の面影が眼前に立ち上つてまいります。広く高い空の下、一面の緑を吹き渡る風の中に立つ上人の姿と、その上人を見守りつづける奥さまの、いつも変わることのない涼しげな眼差しを思い浮かべながら、お二人のご健勝をこの池上から、ずっとお祈りしております。

寛如山 本了院 妙法華寺
法燈 継承 式

平成三十年十月十四日(日)

午後一時

式次第

一

鐘 正午四十五分 寺院・檀信徒昇堂

奏 樂 (法要の開始をつげる音楽で式場を荘厳へ導き、なごませます)

灑 水 散 華 (法要の場所を清浄にします)

天童献花・献茶 (法要の喜びを天童の稚児たちが御宝前に伝えます)

第二 鐘 午後一時 式衆昇堂

始、昇 堂 (法要を行う式衆が本堂に昇堂、合掌でお迎え下さい)

次、開 式 の 辞 (本日の法要の趣旨をご出席の皆さまにお伝えします)

次、道 場 偈 (仏さまをこの道場にお迎えする賛歌をみんなでお唱えします)

次、勸 請 (導師が仏さまに、これからお勤めする法要の趣旨を申し上げます)

次、開 經 偈 (尊い妙法蓮華經の教えを信じ、心静かにお經を読みますと誓います)

次、神 力 品 (爾時佛告上行等より読誦します)

次、中 樂

次、退 山 奉告文 (導師が仏さまに、退山の趣旨を申し上げます)

次、法 燈 継 承 (継承の証として仏子が新住職に授与され、導師が交代します)

次、中 樂

次、神 力 品 (諸仏救世者より読誦します)

次、中 樂

次、入 山 奉告文 (導師が仏さまに、入山の趣旨を申し上げます)

次、中 樂

次、祖 訓 (生死一大事血脈抄)

次、唱題
(日蓮聖人が初めて唱えられた「南無妙法蓮華經」を心の底から大きい声で唱和しよう)

次、祈念回向
(法要の功德がすべてに行きわたるよう仏さまにお願いします)

結、奉送誓
(仏さまの教えを正しく守り行う心構えを四つの項目を上げて誓う言葉を表します)

一、伝達
(一級法功章・三級法功章・住職認証の伝達)

一、記念品贈呈
(目録の贈呈)

一、祝辞
岡山県宗務所長 大野 玄秀僧正
本山立本寺貫主 上田 日瑞僧正
修法師会代表 石川 正之僧正
声明師会代表 平野 信行僧正
生師法縁代表 山本 勝也僧正
庭瀬組寺代表 舩 智修僧正
妙教寺住職 稲荷 日應僧正
一心寺住職 中島 妙江僧正

一、祝電
前住職 下堂 日鑑
新住職 大瀬戸泰康
総代 難波 嗣郎

一、開式の辞
(大法要の円成をつたえ、参詣者にお礼の言葉を申し上げます)

一、奏楽
(法要がまろやかな内に納った喜びを雅楽に託して表現します)

一、退堂
(式衆の退堂します、合掌でお送りください)

一、記念撮影
一、鏡開

以上

生死一大事血脈鈔
總じて日蓮が弟子檀那等、自他
彼此の心なく水魚の思いを成し
て、異體同心にして
南無妙法蓮華經と唱え奉る処を
生死一大事に血脈とは云うなり。
然も今、日蓮が弘通する処の所
詮は是れなり、若し然らば、廣宣
流布の大願も叶うべき者歟、剩
え日蓮が弟子の中に異體異心の
者之あらば、例せば城者を破る
が如し。

退山奉告文

謹み敬つて勸請し奉る南無平等大慧一乘妙法蓮華經南無久遠実成
本師釈迦牟尼佛南無證明法華多宝如来南無十方分身三世の諸仏南
無上行無辺行淨行安立行等本化地涌の諸大菩薩南無文殊弥勒普
賢藥王藥上妙音觀音等迹化佗方來の諸大菩薩南無身子目連迦
葉阿難等新得記の諸大声聞緣覺等別しては末法応持の大導師南無
本化上行高祖日蓮大菩薩六中九老僧等宗門歴代如法勲功の先師先哲
殊には当山開基城国院日鳳聖人歴代の先師聖人等別しては鎮守大
摩利支天王法華經擁護の諸天善神総じては十界勸請の諸尊等來到
道場智見照覧の御宝前に於て本月本日茲に沙門泰鑑謹んで当山妙
法華寺第二十八世退住の儀を告げ奉る

顧みるに昭和四十年五月五日当山住職に就いてより五十五年光
陰正に箭の如く過ぎたるを覺う荒廢したる寺門の復興此を成さん

彼を果さんと思えども其の成果乏しき折聖祖日蓮大聖人の三度に及ぶ記念年を得て住世護持をなし更には信縁大衆の渴仰力の合力を以て大任を力むることを得たるは偏に仏天の冥助と諸山各聖の御交誼また十方檀信徒の帰依の然らしむ所にして宴に感謝の念禁ずる能わず而して既に頽齡を以てその任に堪えず今は命に委ね理に順い法灯護持の重責を信縁の法嗣大瀬戸泰康師に託し退隱するのみ茲に深く御来駕の各位に奉謝し益々の御支援御助力を乞い奉る

伏して願わくは微衷を納受せられ寺門隆昌に無辺の慈悲を伸べ給い併せて拙衲をして余命をもつて法体安全の晩節を全うせしめ給え仰ぎ願わくは当山諸縁吉祥して寺門隆昌の擁護を垂れ給い普く衆庶に無上の法雨を灌いて所願満足ならしめ給わんことを

南無妙法蓮華經

維持 平成三十年十月十四日

覚如山本了院 妙法華寺第二十八世 日鑑 敬白

入山奉告文

一閻浮提未曾有の大曼荼羅御本尊大恩教主釈迦大法皇高祖日蓮大菩薩開山城國院日鳳聖人以来歴代の先師先哲知見照鑑の御宝前に於て法燈継承の式典を修し奉る

当山は不変院の別院として寛永代に建立され戸川氏撫川に移封後は家老森岡氏の庇護を受け繁栄する後に廢藩寺社改革により衰退するも明治八年第二十世圓體院日要聖人再興に尽力され第二十世慈宣院日芳聖人自ら浄財を募り中興と称される

更に第二十八世妙法華院下堂日鑑上人は時勢を鑑み風通し良き当地に伽藍を移され以来堂宇の再興整備をはじめ各堂塔大整備に尽力され輪奐の美悉く備り旧觀面目を一新されかくて専心運営五十五年を結びて退任せらる

伏して惟うに当山は法華の道場大摩利支天王鎮座の浄地最上位経

王大菩薩の慈悲の本源にして朝夜遠近齊しく敬慕し老若男女等しく崇拜す正に檀信徒の安心の寺院として山門繁榮して法燈相傳え日蓮聖人の威光松濤の梵音と共に法運益々啓發せんとす

我れ乏しき資を以て後を承け法燈を繼ぐに当り万感交々感慨たるものあり幸にして檀信徒の諸氏に暖かく迎え入れらるしかも及ばざるを補くるに我れに善師の誘掖あり法友良友の伴侶あり

望ましくは諸聖諸師の加被を蒙り寺檀門信和合して魚の契り弥々堅く相携えて三宝の興隆異体同心以て一天四海皆歸妙法の聖謨を円成せんことを誓い奉る

南無妙法蓮華經

惟時平成三十年十月十四日

本了院妙法華寺 第二十九世

大瀬戸泰康 敬白

入山のご挨拶

この度は、妙法華寺 法燈継承式にご参列頂き、誠にありがとうございます。

この式典を鑑みるに多くの縁を感じています。先ずは生んで下さった父母に感謝申し上げます。

そして一つの転機が中島泰俊上人との出会いです。彼との出会いが僧侶になることへのきっかけとなりました。次に一心寺住職、師匠であります中島妙江上人との出会いです。師匠との出会いが最上稲荷の塾僧として仏道を始めることとなりました。次に下堂泰鑑上人との出会いです。大変厳しい中にも丁寧に指導下さり、塾僧監督として作法などを指導下さりました。次に土師泰隆上人です。木鉦のいろはを教えて下さり、百日行へ行く自信を与えて下さりました。次に杉本行光上人です。日蓮教学を分かりやすく教えて下さり、また、全国の日蓮宗寺院への霊跡参拝を随行させて頂けたことは今も宝であります。次に稲荷日應上人です。遠壽院の百日行へ入行出来る道を作って下さりました。更には稲荷教から日蓮宗へ転宗という一大行事の事務を任せて下さり、大きな経験を積ませて頂きました。次に日蓮宗寺院の方々、特に寺院僧籍課の金森鍊成上人と相原信榮上人です。転宗まで一年という期間での手続きが円満に行えたのも親切的な指導があつてのことでした。また、当時の岡山県宗務所長であられた藤田裕正上人は何時伺つても心やすく教えて下さり、転宗の不安が霧散いたしました。そして妙法華寺に入山する話が出た後、当山檀家各位の方々が温かく迎え入れて下さり、何も分からない中で、よく支えて下さっております。何よりも家内には感謝するのみです。寺庭婦人のなんとるかが分からないまま、苦勞をかけております。下堂慶子様のご苦勞の一端を思うに長年の功勞に頭が下がる思いです。

言葉はつきませんが、本日の為に法務多忙の中準備を下さった庭瀬組寺各聖、同じく寺庭婦人有志の方檀家各位、本日参列の信縁各位、何よりも多くの寺院各聖。何一つ欠けてもここに至ることは出来なかったと思います。

この縁を大切にして、更に精進して参りますので、今後とも変わらぬご指導ご鞭撻をお願い申し上げます。ありがとうございました。

謝 辞

森 岡 健

覚如山妙法華寺 檀徒総代

このたび 覚如山妙法華寺住職下堂泰鑑上人の退山式を執行いたしましたところ、ご来賓各聖をはじめ組内のご寺院各聖、檀信徒の皆様、公私御多用のところにもかかりませず、ご臨席を賜り、まことにありがたく厚くお礼を申し上げます。

更には、多くの方々から懇ろなるご厚志を賜り、下堂上人もさぞかし歓喜なさっていることと存じます。一方、檀信徒といたしましては、御晋山いらい五十五年に及ぶ御親交、特に円熟した伝道手法を以て、いろいろと御指導いただいたこと、特に日蓮大聖人の記念年には必ずや、私共にお題目のこころを説きその手法を教えられました。

その結果が檀徒の皆様の館に反映しています。うれしいことです。たのしいことです。近頃、御法体の不自由を感じられてか、上人の、こころねか「不都合があつては申し訳ない」との懸念から退山を決意されました。退山とは申せ、可能なかぎりお寺のお役に立ちたいと「院首」の席に着かれました。私共は、願わくは今後とも変わらぬご交誼にあずかりたく念願する次第でございます。

なお、後任として大瀬戸泰康上人が入山してくださいます。下堂上人同様のご支援をお願いいたします。本来ならば、お上人と共々、訪問拝眉の上でご挨拶を申し上げるべきところ、本席に於いて、謹んでご挨拶とお礼の言葉に代えさせていただきます。

ありがとうございました。

合 掌

覚如山妙法華寺

檀徒総代 森 岡 健

檀徒総代 難 波 嗣 郎

檀徒総代 佐 藤 勝

賞記

日蓮宗法華寺前住持
下堂泰鑑

日蓮宗に顕著の功業を顕彰し
規程基に一級法功章を
授与す

平成三十一年四月一日
日蓮宗管長僧正菅野日彰



賞記

日蓮宗法華寺前住持
下堂慶子殿

日蓮宗に顕著の功業を顕彰し
規程基に三級法功章を
授与す

平成三十一年四月一日
日蓮宗管長僧正菅野日彰

一級法功章とは

このたび下堂上人に対し、日蓮宗管長は、僧侶に対する最高の栄誉である、「二級法功章」が伝達された。この「一級法功章」とは、「長年に亘って寺門の興隆に尽力した住職に与えられるものと規定されている。下堂上人は、退山に際し、最高の栄誉を手になされました。組内寺院はもちろんのこと、妙法華寺檀信徒の皆さん、上人の永年のご功績を称え、退山の後もそのご功労を後世に申し送り、上人を範師として勇猛精進をお誓い申し上げるものです。



三級法功章とは

このたび下堂慶子寺庭婦人に対し、日蓮宗管長は、寺庭婦人に対する最高の栄誉である、「三級法功章」が伝達された。この「三級法功章」とは、「長年に亘って住職をよく補佐し、寺院の維持に尽力した寺庭婦人に与えられるものです。下堂婦人は、住職の退山に際し、最高の栄誉を手になされました。組内寺院の寺庭婦人の模範たるにふさわしい功績を称え、そのご功労を後世に申し送られる事をお誓い申し上げます。



丕績成満とは

「丕績」ヒセキ：おおいなるいさお、功を納めた様子。さらに具体的な文言として「成満」を付けますと、理解しやすくなる。

「丕績成満」下堂上人が五十五年、戦後困難な時代に寺院の護持に勤め、信念力を傾注して見事に復興をなすとげ、更に大きく景観を整えられたこととはまさに「大いなるいさおを残し、成満された」ということでしょう。これは中興の祖としてふさわしい、上人の為に生まれた文言ではないでしょうか。

上人の為にこの記念誌を「下堂泰鑑上人の丕績成満」と名づけさせていただきました。



妙法華寺での

下堂上人の足跡

昭和三十九年
九月三日

代表役員に就任

昭和四十年
五月五日

本了院第二十八世として
下堂泰鑑上人晋山

昭和五十九年
十二月二十二日

現在地に本堂・客殿建立

昭和六十二年
九月二十一日

現在地に移転完了

昭和六十二年
九月二十一日

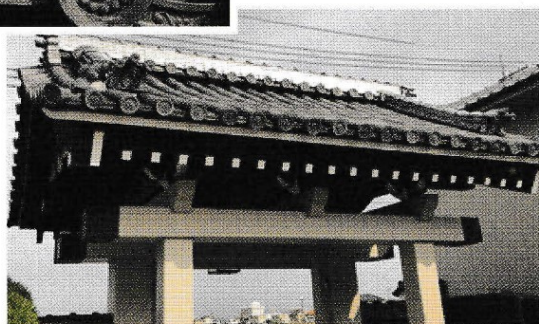
法人名称を妙法華寺に変更

平成四年
十月十八日

山門建立(山門の瓦は
旧本了院の瓦を使用)

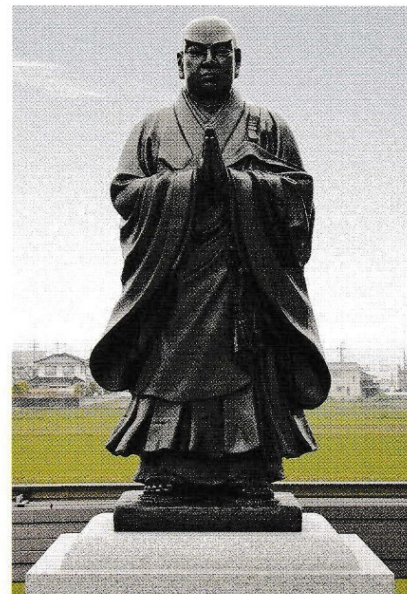
平成七年
八月十日

総合倉庫(富有閣)竣工





平成七年 十二月一日	本殿(摩利支天閣)建立
平成八年 七月二十八日	鐘樓堂建立
平成十四年 二月二十八日	日蓮聖人像建立
平成二十九年 三月十八日	先師供養塔建立
平成三十年 十月十四日	法燈繼承式執行



法燈繼承式参列者（敬称略）

寺院各位

大野玄秀 上田日瑞 山本勝也 平野信行 稲荷智修 中島妙江 岡田弘 靱龍樹 壁村憲尚 秦宏典 濱田恵王 濱田恵康 土師泰範 八木慈秀 長瀬一喜 長瀬幸洋 野田元祐 穴戸妙香 岡嶋泰辰

安森泰壽 小原隆恵 山本観詠 井上隆潤 清水観隆 谷口玄文 垣本良明 獅子原英彰 鈴木純宏 金森錬成 相原信榮 山口妙隆 武末泰憲 藤田裕正 福島義弘 佐久間潮修 大野貴正 八木一成 茂出来裕介 平野光昭 安井智賢 内田智心

神宮寺妙城 江口泰寛 依藤妙晋 衣笠通亮 信徒各位

中島勉 木下唯志 岸卓志 友次太 志村徹 下堂一治 下堂貴政 下堂暢之 西弘 華房淑子 大瀬戸勝子 大瀬戸淳夫 大瀬戸マサエ

檀家各位

難波嗣郎 難波朝子 難波理江子 難波良太郎 佐藤勝 佐藤久美子 富山宗資 富山直子 前原郁仁 前原未来 前原和輝 大江素子 大江隆司 難波要平 安原万里子 大江範子 森岡誠 森岡敏子 江口秀夫 江口直子 江口都雄

難波義博 森下殷昌 森下三津子 庄司博子 永井収 吉田一枝 楠田多喜恵 島村治男 島村豊子 難波孝久 近藤艶子 箕田有紀 岩崎薦恵 小山紀美子 清原稔子 佐藤幸子 稚児奉仕者

嶋田裕太くん 嶋田彩花さん 佐藤那津さん 小原侑大くん 小原莉央さん

横田大斗くん 近藤謹帆さん 江口茉穂さん 江口泰生くん

特別奉仕者

万灯講中

有志の皆様

中原三法堂

有志の皆様

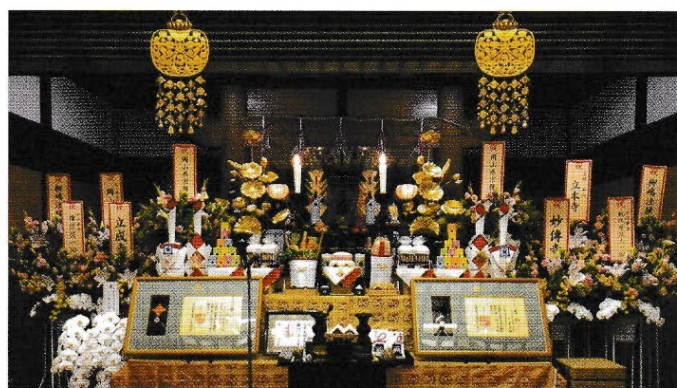
庭瀬組寺庭

婦人会

有志の皆様

感謝申し上げます

合掌



下堂泰鑑上人の
丕績成満

覚如山本了院妙法華寺

〒701-0136 岡山市北区西花尻1279-1

TEL (086) 293-0603